

中部の

エネルギーを 築いた人々

飛騨における水力電気の嚆矢 住民平

住民平は、飛騨高山で岐阜県下初の水力電気事業を成功させた先駆者である。弘化4年(1847)、高山町向山に、商家鷺見長吉の三男として生まれ、飛騨総社の神官田島春園に国学を学び、20歳のとき明治維新を迎えた。地方産業の開発に尽した江馬弥平(県商法局長、飛騨開発社社長)の影響を受け、住は郷里高山の発展に生涯を捧げた。明治12年から高山町会議員を40年、明治28年から高山町の消防組合の組頭を27年勤め、家業として養蚕製糸業を営み、自家に養蚕伝修所を設け、養蚕器具売捌所も開設した。



住民平

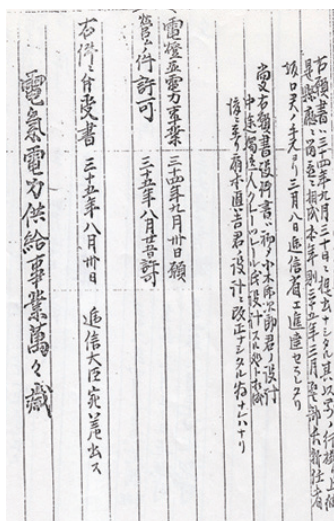
明治22年東海道線が全通すると、岐阜県内に飛騨鉄道敷設推進運動が起き、住も早くから運動に参画し、第1期編入敷設請願活動の調査委員として、東京・高山を往復した。運動は効を奏せず第2期工事に廻された。このため、住は、私設鉄道として飛騨鉄道株式会社を計画したが資金が集まらず、計画は明治31年に頓挫した。この間、住は多くの私財を失った。



養蚕器具売捌所

飛騨鉄道敷設運動から電灯事業へ

住は消防組に関わる中で、石油ランプがしばしば火災の元となることに思いをいたし、電灯に注目するようになった。鉄道敷設運動が頓挫した明治31年夏、住は益田川支流の青屋川に取水し、分水嶺を越えて宮川片野附近に発電所を設ける水力発電事業を計画した。この計画は工事が大がかりになるため、神通川支流小八賀川の新張用水を利用する計画に変更された。地元の丹生川村、上枝村は協力的で明



「電氣電力供給事業萬々歳」の書込み

治32年5月、両村議会の承認が得られた。これを受け33年8月、住民平初め発起人11名が逓信大臣に電灯供給営業許可を願ひ出た。しかし初め賛同した人々も、事業の行方に危惧を抱いて取り消し、申請は却下(同年9月)となった。住は「営口頭ノ賛成ノミニテ資金ヲ投下スルモノナク加フルニ野心中傷等ノ反対ノ声ヲ聴ク」(住民平履歴書)と、後に述べている。

住はこれにめげることなく、

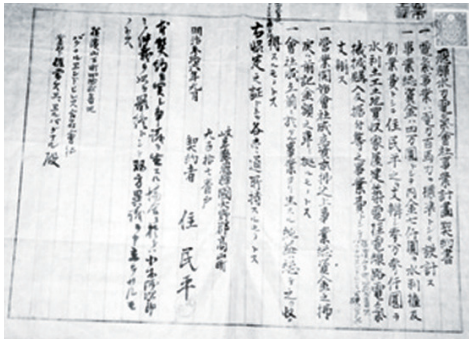
個人として事業化をめざすこととし、使用地の契約、水路工事期限の延長、技師の選定などを進めた。明治34年9月、実兄住長三郎、地元の横山元親の3人で再申請し、翌35年

8月25日逓信大臣の許可が下りた。このとき、書類に、住は「電気電力供給事業萬々歳」と書き込んでいる。

小木虎次郎の支援



さらなる困難は事業資金の調達であった。当初の地元発起人には期待できず、近隣の吉城郡、益田郡のほか、美濃、岐阜方面まで足を伸ばしたが協力者は現れなかった。そんな民平に、東京在住の知己森正三郎から「シホンデキルスグコイ」と電報が届いた。住は家屋敷を売り、もはや裸の自分しかないと



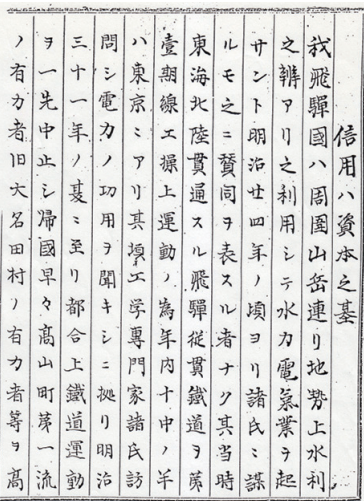
バグナルエンドヒレス商会との契約書

けの結果となった。このとき、事業認可の期限の明治36年9月末まであと1ヶ月に迫っていた。

住が最後に頼ったのは、旧知であった京都大学教授小木虎次郎であった(『ひかりとねつ』平成21年9月号参照)。小木は住の書簡を受け取ると、明治36年8月末、高山を訪れた。(このときの喜



住民平と小木虎次郎



「信用者資本之基」(住民平)

びを「全ク天佑ナルカナ」(『信用者資本之基』)と住は記している。)来高した小木は顧問をしていたバグナル・エンド・ヒレス商会を紹介し、事業費3万4000円を支援する契約(9月1日)を斡旋した。また、工事主任として愛弟子笠原謙次郎を紹介し、笠原は9月19日に来着、工事を担当した。

起業電灯・為開花光

宮川の支流小八賀川に取水(丹生川村新張地区)し落差50尺を得て、上枝村大字下切地区に出力75kWの下切発電所の建設が進められた。機器はバグナル・エンド・ヒレス商会が納入、明治37年11月11日、岐阜県下で最初に成功した水力発電所、県下で3番目の電気事業として開業した。開業の日、住は「雨露のつとひとつとひし丹生かわの水のなかれは今日のとしも火」と詠んだ。計画以来6年がたち、民平は57歳になっていた。事業が軌道にのった明治39年7月株式会社組織に改組



下切発電所外観(改修前)



下切発電所内部装置(改修前)



設立当初の飛騨電灯記念写真(中央：住民平)

され、専務取締役役に小木虎次郎が就任し、住民平も取締役となった。開業時270灯であった電灯も、2年後には1000灯に達し、1割の配当ができるようになった。順調な業績を見て、「電灯高山町有化」の声が高まり、明治41年3月、事業の主体は小木の手から地元事業家に移った。専務取締役となった小森文助は、当初参画した発起人の1人であった。

大正2年12月、地元上枝村の人たちは水路の途中に「飛騨水力電気嚆矢住民平翁紀功碑」を建立した。碑文には、発電所の余剰水が地域に安定した灌漑用水をもたらしたことへの感謝とともに「位山之麓、宮川之辺、起業電灯、為開花光」と記された。住は、大正11年5月、享年75歳で逝去、葬儀は町葬を以て営まれた。飛騨電灯会社は「飛騨における水力電気の嚆矢」とその功を称え、感謝状に金1封を添えて贈った。昭和57年7月にも、住の居宅跡に「住民平翁顕彰碑」が同顕彰会の手で建てられ、千辛万苦、百折不撓の志で電灯事業に取り組んだ住の功績を称えている。

(浅野 伸一)



住民平翁紀功碑



住民平翁顕彰碑(昭和57年7月)